

CACS FORUM No.9 発行に寄せて

研究機構長 伊藤 修

科学分析センター機関誌『CACS FORUM』No.9 発行、おめでとうございます。

本センターの前身「分析センター」が昭和 55 (1980) 年に設置されて以来、今年で 38 年を数え、機関誌も本誌の前身時代から毎年度、研究に関する記事の掲載が積み重ねられてきました。その全体像はホームページで見ることができます。

私は研究機構長に就いてまず、初めてセンターを見学し、説明をしていただきました。非常に高度な（そして高価な）機器が並んでいることは驚きでありました。またこの稿の執筆にあたり、初めて HP から機関誌バックナンバーを開いてみて、これらを合わせ、HP「概要」にいう「学内共同利用施設として、各種の物性測定を通して教育・研究のために利用されるほか、分析技術の研究、開発を行うという（中略）役割を担うため、センターには各種高性能の分析装置が設置され、運営委員会の統括の基に専門委員と指導者によって管理運営されています」という活動の積み重ねが、頭の中で像を結んだところでした。活動の具体的中身については本誌に詳しく報告されていますので、重複してここで素人が口を挟むことは省きましよう。センター・スタッフのご尽力がさらに重ねられ、研究者による活用とその成果がますます挙がることを、念願するものであります。

＊

＊

＊

さて以下では、この場をお借りして、大学での研究というものについての、現在の私の個人的な考えを、簡単に述べさせていただきたいと思います。

「教育学問は百年の計というが、いまやそんな悠長なことは言っていられない」という趣旨の、影響力ある（はずの）人物の発言を、最近どこかで読みました（詳細は失念）。しかし私は、やはり教育・研究は百年の計だと思うのです。もちろん、成果に無頓着でのんびりやっていたらいいわけではありませんが、長期にじわじわと影響が出てくるものだから、近視眼的な損益でなく、腰の据わった重視が必要だと。

研究は大学というものの根本の根本、そして大学の力を上げるとは、「埼玉大学といえば〇〇の分野では△△先生がいるところ」という評価で満たすことだと思っています。そして研究は基本は個人、チームであっても個人の実力がまず基本。志は高く——すなわち既存枠組みの延長上のセコい改良で学界内地位確保を追うのではなく、恐れず真理を追うこと。限界までの調査、事実の深掘り、一方で広い視野からの論理構造の考察の追求、といったものが分野を問わず必須でしょう。深く・広く、ですが、広さを支えるものの1つは他の学問分野からの刺激であり、その意味での教養が、学生（教育）にとってだけでなく学者（研究）にも重要と考えます。自分の分野だけでなく、どの分野も大事なのだと思えないのは、教養不足というものでしょう。部局や分野を超えて学問的会話が学内に満ちるのが理想です。それでこそ良い教育もできるのではないのでしょうか。

いま、環境はとても悪いです。まず時間がない。これに対しては「時間回復プロジェクト」を展開中であり、ます。極限まで合理化・効率化し、余裕をもつてものを考えられるための研究時間をひねり出しましょう！もう1つ、カネも不足です。運営費交付金も、科研費その他の資金も、研究に必要なカネは何とかして確保に努めましょう！そして、科学分析センターをはじめ共用設備・機器は、有効に活用を！

悪条件に負けず、流されず、（何と言われようが）真理追求をめざして歩を進めたいものです（以上あくまで個人的な意見）。